

## モダニズム建築の特質とは何か

What is the Feature of Modern Architecture?

松隈洋 | Hiroshi Matsukuma

2020年12月、神奈川県立近代美術館は、国の重要文化財に指定された。敗戦後間もない1951年11月に開館した最初の公立の近代美術館だ。「カマキン」の愛称で長く親しまれ、2016年3月31日閉館までの65年間、500を超える展覧会を開催し、戦後の文化史に欠かせない存在として世界的にも有名だった。また、坂倉準三が、師のル・コルビュジエの影響を受けながらも、そこに日本的な感性を盛り込んで、周囲の環境に溶け込みつつ、新しい風景をつくり上げたことから、「戦後モダニズム建築の出発点となる建物として重要である」との高い評価を得たのである。

当初は、借地契約の切れる2016年3月に更地での返還が予定されていた。しかし、存続を求める声が多方面から寄せられたことを受けて、県は土壇場の2015年に本館の保存を決定、2016年11月に県の重要文化財に指定し、12月に鶴岡八幡宮に無償譲渡され、耐震と改修工事を経て、2019年6月から鎌倉文華館鶴岡ミュージアムとして開館した。そして続く国の重文指定は、2016年に国立西洋美術館を含むル・コルビュジエが世界各地7カ国で手がけた17件の建築の、ユネスコ世界文化遺産への登録と連動した動きに違いない。その意味で、20世紀のモダニズム建築 (Modern architecture) が文化遺産の対象となり始めた時代の転換点の象徴と言えるのだろう。

ただ、残念なことに、坂倉の存命中に増築された新館と附属棟は、耐震性などが障害となって、県の重文指定前に取り壊され、本館のみの保存になった。また、材料の乏しいなか、特注で製作された外壁のアスベストボードやアルミジョイナーなど貴重な部材が、無造作に廃棄された。さらに、坂倉の大切にしていた清潔な納まり、建築を構成する各要素を明晰な形で自立的に表現する方法、を軽んじるような、精度の粗い納まりも散見され、正面の大階段から入館するルートも変更された。そして、周囲には薄い大谷石を貼った紛い物の塀と本館にそぐわない切妻屋根のカフェが新築されるなど、美術館の清新な心地好い緊張感と余白は失われてしまった。

たしかに、さまざまな困難を乗り越えて改修工事が施され、再活用が図られたこと自体は、大きな成果なのかもしれない。けれども、減築という苦しい選択を受け入れたうえで、重文化を目指すという高い目標のもと、本来なら慎重な判断と合意形成が求められるなかで、どのような検討作業が進められたのか。筆者はその詳細に不案内だが、残念ながらこ

旧・神奈川県立近代美術館  
(2019年4月22日、筆者撮影)



こに露呈したのは、モダニズム建築の特質とは何か、という共通理解の欠如という深刻な事態であるように思えてならない。

様式建築は、石や煉瓦という重厚な素材に覆われ、モノとしての存在感を有する彫刻のような記念碑的な建物であり、当然のことながら、そこには潤沢な工事費が投じられていた。それに比べて、モダニズム建築は、身近な生活環境を形づくる機能的で実用品のような性格をもち、経済的な合理性を担保するために、厳しい予算のもとで建てられた。しかし、そこに託されていたのは、建築と人間との社会的、文化的な関係性の根本的な転換であり、権威の象徴としての建築から人間のための建築へ、と端的に形容できるまったく新しい建築の姿だった。この神奈川県立近代美術館が実現させたのも、美の殿堂から脱皮し、美術をより身近な環境に置く、という、人間と美術との接し方の刷新だったのではないかと。そして重要なのは、その特徴が民主主義社会を築こうとする戦後精神と共振し、それを体現するものでもあったことだと思う。しかし、それらの特質は、高度経済成長時代の建設ラッシュと建築の巨大化のなかで、次第に見失われていく。また、建てられた当時の経済状況の厳しさや材料不足などの制約もあって、これらの建築の多くは、モノとしての傷みややすさと規模の小ささという脆弱性をもっていた。

こうして、気がつけば、東京駅や赤坂離宮、京都市京セラ美術館など、様式建築の保存改修が盛んに進むなかで、モダニズム建築の意味が共有されることなく、次々と姿を消しつつある。もし、このまま何の手立てもないまま放置すれば、早晚、良質な戦後モダニズム建築の多くは失われ、そこに込められた戦後精神の継承も試みられた方法の共有も不可能となってしまいうだろう。だからこそ、モダニズム建築の保存活用には、その特質を理解したうえでの慎重で繊細な方法が求められているのだと思う。重文化された神奈川県立近代美術館は、今もなお、そのことを私たちに問いかけている。

松隈洋 (まつくま・ひろし)

京都工芸繊維大学教授/1957年生まれ。京都大学卒業、前川國男建築設計事務所に入所。2000年京都工芸繊維大学助教授、2008年より現職。博士(工学)。近代建築史。主な著書に『建築の前夜 前川國男論』(日本建築学会論文賞)ほか